

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

鳩間方言の人体関係語彙（？）

著者	加治工 真市
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	18-19
ページ	215-226
発行年	1995-02-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/11999

鳩間方言の人体関係語彙 (I)

加治工 真 市

ア「カ」ジラー 「ナスン [ʔaˈkaˈdʒiraː ˈnasuŋ] (句)。相手を侮辱し、面目を失わせる。恥を搔かせる。例、ウ「ビ」ヌ プスヌ ナカ「ナーティ アカ」ジラー ナサ「リティ バッカヤ」ヌ 「ウナー プ「ラランセン [ʔuˈbiˈnu puˈsunuˈ naˈkaˈnaːti ʔaˈkaˈdʒiraː naˈsaˈriti bakˈkajaˈnu ʔunaː buˈraranseŋ] (あれだけの人の中で、恥をかかされて、恥かしくて、そこにはおれなかった)

ア「キミックワー [ʔaˈkimikkwaː] (名)「明き盲」の義。無学の人。文字の読めない人。無学の人を卑しめた言い方。例、イ「カナ」 ア「キミックワー 「ヤラバン 「アイヤ プ「スヨ「 ウ「サイルムノー「 アラ「ヌ [iˈkanaˈ ʔaˈkimikkwaː ˈjaɾabagˈʔaijaː puˈsujɔː ʔuˈsairumunoː ʔaˈraˈnu] (いかに文盲であろうとも、あのように人を見下し、ばかいするものではないよ)

「イン」ヌヤー [ˈʔinˈnujaː] (名) ものもらい。目のふちにできる腫れ物。瞼の睫の生えたところや目尻、目頭のあたりが、カサカサして異物感があって一昼夜ほどたつと、ものもらいになることが多かった。例、「イン」ヌヤーヌ 「ンジティ 「ミー「ヤ ア「ガーカ「シバ「リバー「 [ˈʔinˈnujaː nuˈ ʔndʒiti ˈmiː ˈja ʔaˈgaː gaˈʃi paˈribeː] (ものもらいができて、目が赤く 腫れている)

イ「シスブラー [ʔiˈʃisuburaː] (名)「石頭奴」の義。「頑迷固陋の奴」の意。イシスブル(石頭)に、-jaː (～奴、～人)の接尾辞が下接して形成された語、卑語。例、アイ「ブ「 イ「シスブラー「 ティン 「ブン「ツォ 「カー [ʔaiˈbuˈ ʔiˈʃisuburaː ˈtim ˈbunˈtso ˈkaː] (あんな石頭奴《頑迷固陋な奴》なんて、他に居るものか、珍しい限りだ)。

イ「シスブル [ʔiˈʃisuburu] (名)「石頭」の義。①「石のように硬い頭」、例ウ「リヌ「 ス「ブ「ロー イ「シスブル「 ヤ「ルンダ「 ヤ「マ「ヌ [ʔuˈrinuˈ suˈbuˈroː ʔiˈʃisuburuˈ jaˈrundaˈ jaˈmaˈnu] (彼奴の頭は石頭だから痛くない)。

②「頑迷固陋である」。例、「ウンザー「 イ「シスブル「 ヤ「ルンダ「 プ「スヌ「 ムニシ「カヌ「 [ˈʔundzaː ˈʔiˈʃisuburuˈ jaˈrundaˈ puˈsunuˈ muni ʃiˈkanuˈ] (彼奴は、頑迷固陋であるから、他人の言うことばは聞かない)

ウ「キスー」ルン [ʔuˈkisuː ˈɾuŋ] (動) 赤児や乳児などが眠りからすっかり目覚める。赤児や乳児が朝目覚めて手足を動かしながら、目を大きく見開く。ヤ「ラ「ベー 「ミー「ヤ キサー「ティ「 ウ「キスー「リティ 「ゴン「ゴー「シ サ「ニンケー「リバー「ン「ティ

[jaʔraʔbe: ʔmi: ʔja kisa: ʔtiʔ ʔuʔkisu: ʔriti ʔgʔgo: ʔggo: ʔʃi saʔniŋke: ribe: nʔti] (赤児《童》は、目はすでに目覚めて、ンゴーンゴーといって喃語を発して喜んでいるよ)
 「ウツソソ [ʔʔusʔsoŋ] (名) 盆の窪。首の後から後頭部に至る途中の窪んだ所。頭痛の際、両手の拇指でそこを強く押し、中指でひよめきの部分を押し、頭痛を治す民間指圧療法のつばがあると言われている。

また、乳幼児などは、[ʔʔusʔsoŋ] の部分の頭髪を残して、他の頭髪は刈る風習がある。伝承によると、ウツソソに髪を残しておくとは風邪をひくこともなく、魔がつくこともないという。この部分の頭髪を、カミヌ・ズー [kaʔminu-dzu:] (亀の尾) という。乳幼児死亡率が高かった頃、乳児を魔の手から防ぐために、長寿の象徴である「亀」に長寿の予祝をを授けてもらう願意と、この部位が大切な所であることを経験的に知っていて、そこを外傷から守る意味もこめて命名したものであろう。「ウツソソ」又 カミヌ・ズーヤ「スル」ナ [ʔʔussoŋnu kaʔminu-dzu:jaʔ suʔruʔna] (盆の窪の髪 「亀の尾」は剃るな)。

ウブ・スブル [ʔuʔbu-subuʔru] (名) 「大頭」の義。異常に頭の大きな人。大頭症の人。生まれつき、頭が大きく、体格がひ弱な人。ウブ・スブラー [ʔuʔbu-subuʔra:] (「大頭症の人」の卑語)。これは、ウブスブル [ʔuʔbu-subuʔru] (大頭) に接尾辞-ヤー [ja:] (～奴) が下接して形成された語。喧嘩する際に、ウブ・スブラー 「マーシ」ノ [ʔuʔbu-subuʔra: ʔma: siʔno] (大頭奴めが) などと言って相手を罵倒するのに用いた。

ウムティ [ʔuʔmuʔti] (名)、「面」の義、^{オモテ}「顔」の意。ウムティ フクルン (顔が腫れる) とは言えるが、「不機嫌になる」の意で、ウムティ フクルン [ʔuʔmuʔti ʔʔʔʔkurug] とは言えない。また、ウムティ [ʔuʔmuʔti] (面) は、ウムティ シムン [ʔuʔmuʔti ʔsimuŋ] (^{オモテ}面を《顔を》澄ます《洗う。洗顔する》) のように用いられる。

カーミー [ka: mi:] (名) 「皮目」の義。一重瞼のこと。一重瞼の人は、目蓋が腫れぼったいように見え、女性の場合はどことなく憂顔に見えるのに対し、男性の場合は、睡眠不足の顔に見える。例、ヤマトウブスナル カーミーヤ 「ゴー」ラー 「ナー [jaʔmatu-ʔpʔsuna: ru ʔka: mi: ja ʔgo: ʔra: ʔna:] (大和人《本土出身者》の中に、一重瞼の人は多いようだねえ)

カタスブル [kaʔtasubuʔru] (名) 「片頭」の義。カタスブル・ツヤン [kaʔtasuburu-ʔjaŋ] (「片頭痛」の義。偏頭痛のこと)。ツヤンティル アイブ「ユーカタスブル」ヌ ツヤム 「ツォー [nuntiru ʔaiʔbuʔ-ju: kaʔtasuburuʔnu ʔamuʔtso:] (どうしてなのか、偏頭痛がするんだよ)。パナシキ 「ママリティ」 カタスブル「グッファ」ツォー [paʔnasiki ʔmamariʔti kaʔtasuburuʔnu ʔgufʔfa ʔtso:] (風邪をひいて、片頭痛が重い《偏頭痛がする》)

カタミー [kaʔtaʔmi:] (名) 「片目」の義。カタミー「ヤ ツサイ [kaʔtami: ʔja sʔsai]

(片目はつむりなさい《閉じなさい》)。「ティップ^ツシ^ツ カマイ^ツ イ^ル^ツ ピンマー カ^ツ タ^ミ^ツ ヤ^ツ ッ^ツ サ^ツ イ^ツ ティ^ツ タ^ミ [ʔtippuʔʃi ʔkamai ʔiʔru ʔpimma: kəʔtami: ʔja sʔsaitiʔtami] (鉄砲で猪を射る《撃つ》ときは、片目をつぶって狙いなさい)

「ガッ^ツパイ [ʔgapʔpai] (名) 前頭肥大頭。前頭部が肥大し、発達した頭をいう。ガッ^ツパイ・スブル [ʔgapʔpai-suburu] ともいう。これも卑語化すると、「ガッ^ツパ^ツヤー [ʔgappaʔja:] となる。最近では産婦も病院で分娩するせいか、ガッ^ツパイ・スブルのような頭の形態が少なくなっているようである。昔(昭和30年頃まで)は、幼児などが「ガッ^ツパイスブルとか、「ガッ^ツパ^ツヤーなどと渾名されて、それが悔しくて、喧嘩をしたものである。

カ^ツラ・スブル [kaʔrasuburu] (名) 頭蓋骨。しゃれこうべ。ア^ツライ・クサイ [ʔaʔrai-kusai] (洗骨の法事) の際に埋葬した遺骨を骨壺に納め、墓の中に入れた。その頭蓋骨を、サ^ツリ・スブル [saʔri-suburu] ともいう。洗骨のことを、「シン^ツクチ [ʔsigʔkutʃsi] (「洗骨」の義) ともいう。イ^ツラ^ツカマイナー カ^ツラスブルヌ 「アッ^ツタン [ʔiʔraʔkamaina: kaʔrasubunu ʔatʔtaŋ] (イ^ツラ^ツカマイ《地名、大前の南側》には頭蓋骨があった)

「カン^ツパー [ʔkampa:] (名) 頭部に損傷を受け、傷跡が禿げているもの。その人を多少卑しめていう場合に用いる。ニックネームとして用いられる。また、愛称や尊敬の接尾語「アー^ツザ [ʔaʔʔdza] (兄) が下接して、「カン^ツパ・ザー [ʔkampa-dza:] (カンパ兄) のように用いられるが、本人に対する呼称としては用いられない。名称として用いられる。カ^ツザケヌ 「カン^ツパザー 「バン^ツタ イ^ツチ^ツフ [kaʔdzakenu ʔkampadza: ʔbanʔta ʔiʔtsiʔʃu] (加治工のカンパ兄は私たちの従兄弟だ)

カン^ツパザー [ʔkampadza:] (名) カンパ兄さん。頭部に傷跡の禿げのある人を敬って言うときに用いることば。本人に対する呼称としては用いない。例、「カ^ツザケ^ツナー 「カン^ツパザー^ツティ ア^ツズ^ツ プ^ツソー 「オー^ツタン^ツ メー [kaʔdzakeʔna: ʔkampadza: ʔti ʔaʔdzuʔ puʔso: ʔo:ttamʔ me:] (加治工家にカンパ兄さんという人はおられたかねえ)

「カン^ツパツァー [ʔkampatsa:] (名) 頭部に損傷を受け、その部分の傷跡が禿げている人。多少、相手を揶揄する気分がこめられている。一種の卑語。また、親愛、尊敬の接尾語-a:ʔdza (兄) が下接すると、「カン^ツパツァザー [ʔkampatsadza:] (カンパチ兄さん) のように用いられる。

「カン^ツパチ [ʔkampatʃi] (名) 頭部に損傷を受け、その部分の傷跡が禿げているものをいう。そのような人に対しては、「カン^ツパー [ʔkampa:] といい、卑語化する。ニックネームとして用いられたりする。例、ク^ツヌ 「カン^ツパチュー^ツ ヨー ヤ^ツラ^ツビ 「シェーン^ツケン 「キー^ツヌ・パン^ツターラ 「ウ^ツティティ ス^ツク^ツレーム ダ^ツレー^ツ [kuʔnu ʔkampatʃe:ʔ

jo: ja^hra^hbi ^hʃe:ŋ^hkeŋ ^hki:nu-pan^hta:ra ^hʔutiti sy^hku^hre:mu da^hre^h:] (このカンパチは、幼少の頃、木の先端より落ちてつくったものだよ)

シ^hカ^hミ^hー [ʃi^hka^hmi:] (名)「近目」の義。近視のこと。遠視に対する語は認められないが、40歳代になると、「ミ^hー^hヌ^h」^hムイルン [mi:nu^h ^hmuirun] (目が燃える。ジラジラして見えにくくなる) などと言う。例、^hダンブヌ^h ガ^hル^hナ^hー^h ク^hマ^hー^hク^hマ^hー^hヌ^h ジ^hー^hバ^h ユ^hミ^hティ^hール^h シ^hカ^hミ^hー^h ナ^hレー^h ヨ^hー [dampunu ga^hru^hna kuma: ^hkumanu ^hdʒi:ba^h jumiti:ru ʃi^hka^hmi: ^hna:re: jo:] (ランプの明りのもとで細かい字を読んだので近視になったのだよ)

フ^hシ^hラ [ʃira] (名)「面^フ」の義。顔のこと。ウ^hム^hフ^hティ [ʔu^hmu^hti] (「^{オモテ}面^フ」、顔のこと) に対して、多少、品位の落ちる表現性を有する。フ^hシ^hラ フ^hウト^hウン [ʃira ʔutuŋ] (面^フを打つ、殴る)、フ^hシ^hラ フ^hクル^hソ [ʃira ʔu^hkuruŋ] (面腫れる、腫れ面をする)、フ^hシ^hラ フ^hクラ^hー [ʃira ʔu^hkura:] (ふくれつつらの人《女性》、不平たらしい女)。フ^hシ^hラ ガ^hラ^hヌ [ʃira ga^hranu] (顔が明るくならない。暗い顔つき、はればれとしない。) ン^hカ^hイ^hジ^hラー^hラ^h ス^hズ^hー^hコ^h イ^hザ^hレー^hン [ʔʲʲkai-dʒira:ra^h sudzu:ko^h ʔi^hdzare:ŋ] (向かえ顔より《初対面から》したたかに叱られた) のようにマイナス面の表現と結びつくことが多いようである。また、ウ^hリ^hヌ^h シ^hラ^hス^hクリ^hヨ^hー^hヤ^h ビ^hケ^hー^hヌ^h・ウ^hヤ^hト^hッ^hピ^hツ^hティ^h ニ^hー^hブ^h ツ^hォ^hー [ʔu^hrinu^h ʃi^hrasukurijo:ja bi^hke:nu-ʔuja^htu bit^ht-suti ni:bu^h tso:] (これ《この子》の造り様《面^フつき、顔^フつき》は父親とそっくり似ているようだ)

シ^hラ^hー^hマ^h [ʃi^hra:ma] (名)「小さな顔」の意。ー^hマ^h [-ma] は指小辞。親愛の情を表す接辞でもある。シ^hラ^hー^hマ^hは、疾病等により、顔が痩せ細って小さくなったもの。例、^hヤ^hン^hマ^hイ^hン^h ウ^hソ^hー^hリ^h ヨ^hー^hガ^hリ^hティ^h シ^hラ^hー^hマ^h ナ^hリ^h オ^hー^hル^h [jam^hmaing ʔu^hso:ri jo:gariti^h si^hra:ma nari^hʔo:ru]

(病気にうちのめされて、痩せ細って、小さな顔になっておられる)

シ^hラ^hカ^hタ^hチ [ʃi^hrakata^htʃi] (名)「顔形」の義。顔つき、容貌、面だち、顔だち、マ^hリ^hカ^hタ^hチ [ma^hrikatatʃi] (「生れ形」の義。生れつきの容貌の意) の対語として用いられる。例、シ^hラ^hカ^hタ^hチ^hン^h マ^hリ^hカ^hタ^hチ^hン^h ア^hザ^hケ^hー^h・ア^hザ^hケ^hー^hフ^hシ^hティ^h イ^hカ^hシ^hック^h ア^hタ^hラ^hサ^hワ^h ツ^hォ^hー [ʃi^hrakata^htʃim ma^hrikataʃiŋ ʔadza^hke:-ʔadzake:ʔ-ʃi^hti ʔi^hka^hʃi^hku ʔa^htara^hsawa tso:] (顔つきも、容貌も楚楚として どんなにか可愛いことか)

フ^hシ^hラ^hフ^hクラ^hー [ʃira ʔu^hkura:] (名) 腫^フ面^フの人 (女)。不平不満の気持ちを表情に表す人。女は通常、自分の気持ちを言葉に表すことをしないで、腫^フ面^フをして、不承不承、命ぜられるままに従って仕事をした。シ^hラ^hフ^hクラ^hーをすることが、精一杯の反抗であった。親や姑は、娘や嫁の気持ちを汲みとり、最後には娘や嫁の無言の主張を容認した。封建時代に

おける自己主張の便法として、娘や嫁たちは、シラフクラーを活用した。

シ「ラ」ヌ 「カー [ʃiʔraʔnu ka:] (連語) 面の皮。鉄面皮、恥知らず。例、「ヌー」シ 「ブー」 シ「ラ」ヌ 「カー」バ 「ムティ」 「ブー」ユー バ「カ」ヤン 「ナー」ナ 「セー」ティ 「アー」ク 「ツォー」 [ʔnu:ʔʃiʔ bu:ʔ ʃiʔraʔnuʔ ka:ʔba mutiʔ bu:ʔju: baʔkaʔjanʔ na:ʔnaʔ se:ʔtiʔ ʔa:ʔkuʔ tso:] (どんな面の皮を持っているのか、恥しげもなく、ふるまっているよ、珍しいことだ)

シ「ラ」ヌ 「ソー [ʃiʔraʔnuʔ so:] (連語) 「面^{つら}の性」の義。正気か狂気かは表情によって判断できるが、その表情に現れた正気をいう。発狂するときは、シ「ラ」ヌ 「ソー [ʃiʔraʔnuʔ so:] (面の性、表情) が失われるという。例、「ミー」ヤ ウ「キティ」 シ「ラ」ヌ 「ソー」ン ウ「ティ」 「ナー」ヌ [ʔmi:ʔjaʔ ʔuʔkitiʔ ʃiʔraʔnuʔ so:ʔ ʔutiʔ na:ʔnu] (目が浮いて《焦点が定まらず、キョロキョロして》、顔の表情も、正気が失われてしまった)

ス「ブ」ル [suʔbuʔru] (名) ①頭、「つぶり」の転。「つぶら」(円) と同源。頭蓋を構成する部分の総称。カ「ラスブル」 [kaʔrasuburu] (頭蓋骨、しゃれこうべ)。プ「スヌ・スブル」 [pʉʔsunu-subuʔru] (人の頭)、イ「ズヌ・スブル」 [ʔiʔdzunu-subuʔru] (魚の頭)、ウ「シヌ・スブル」 [ʔuʔʃinu-subuʔru] (牛の頭)、②脳、能力、才能、例、ス「ブ」ロー カ「チ」ブ [suʔbuʔro: kaʔtʃiʔbu] (頭は勝っている。優れている) ③ス「ブ」ル 「グッ」ファ 「ン」 [suʔbuʔruʔ guʔʔfaʔ ʔn] (頭が重い、気分がすぐれない、風邪気味である)。④ス「ブ」ル 「ヤミ」 ナ「ラ」ヌ [suʔburuʔnuʔ ʔjami naʔraʔnu] (頭痛が激しい。《頭が病み、どうにもならぬ》)。「頭痛」のことを、ガ「マジ」ヤミ [gaʔmadʒiʔjami] ともいう。熱はないのに頭痛がある場合、両手の拇指でこめかみのあたりを押さえ、中指でピ「ル」キ [piʔruki] (ひよめき) のあたりを押さえた。また、よもぎ(蓬)の汁を飲ませて鎮痛薬とした。

ス「ブ」ル「イ」シ [suʔburuʔʃiʔi] (名) 「頭石」の義。「半球形の珊瑚石」のこと。海石一種。ミドリイシ科やキクメイシ科に属する珊瑚石で、直径30cm～60cmの半球形に形成されているのが多い。表面に菊花状の珊瑚の突起物がある。干潮時には海面上に現われ、人頭形に見えることから命名されたもの。昔(戦前)は、それをイ「シジ」 [ʔiʔʃidʒi] (礎石) として家屋建築に用いた。

「ソー」マー [ʔso:ʔma:] (名) 「白目」の義。斜視のこと。生れつき、瞳が内側や外側に寄りすぎて、白玉《水晶体》の部分が多い目のこと。またそのような人。例、マ「ナマ」ヌ 「ユー」ヤ イ「サ」ヌ イ「ッ」ケナ カナイ 「オー」レーティ 「ソー」マーン 「ノー」シ「ソー」ル [maʔnamaʔnuʔ ʔju:ʔjaʔ ʔiʔsaʔnuʔ ʔikʔkenaʔ kanaiʔ ʔo:ʔre:tiʔ ʔso:ʔma:nʔ no:ʔʃiʔso:ru] (今の世《現代》は医者^{いしや}が優れておられるので、斜視も直すことがおできになる)

ダリミ [da'ri'mi:] (名)「垂れ目」の義。目尻が垂れさがっている目、その人。目尻の下った人はおとなしく、気性の穏やかな人と言われている。従順ではあるが、活気がなく、積極性もなく、怠惰で人に指図される側面をもつイメージが大きい。例、ダリミヤ イキブイヌ ミラランバン [da'rimi: ʔja ʔi'kibuinu mi'raramʔbag] (垂れ目の人は、覇気が見られないわい)

ツフタマ [ʔfu'tama] (名)「黒玉」の義。瞳や虹彩のこと。これを、「ミーヌッフア」[mi:nuʔffa] (目の子)ともいう。例、ヤラビパダナ パナンギ シーティル グシシ ミーヌ ツフタマ ウイヌキ ミックワー ナレーティ ムカー [ja'rabi'padana pa'nagʔgi ʔʃi:tiru guʔʃiʔʃi mi:nuʔfu'tama ʔuinukiti mik'kwa: ʔnare:ti ʔmuka:ja] (子供の頃にいたずらして小竹で瞳を突き刺し、盲になったんだよ)

ツスタマ [ʔsu'tama] (名)「白球」の義。眼球の水晶体のこと。例、トゥシ トゥルカー ミーヌ ツスタマヌ ユンゴリティ ムヌ ミリングリサー ナル ツォー [tuʔʃiʔ turuka: ʔmi:ʔnu sʔutamaʔnu ju'nungo:ʔriti mi'ringguri'sa: ʔnaru ʔtso:] (年をとると、目の白球《水晶体》が濁って、ものが見にくく《見づらく》になるそうだ)

ナダ [nada] (名)涙。「ミーナダ」[mi:ʔnada] (涙)ともいう。ナミダ→ナンダ→ナダのように音韻変化を起こしたものであろう。例、「ゾールゾールシ ナダ パラシ ナキベ」[dzo:rudzo:ruʔʃi ʔnada pa'raʔʃi na'kibe:] (ゾールゾール音をたてて涙を走らせ《流し》て泣いている)。鳩間方言では、涙は音をたてて流れ落ちるし、走るように流れ落ちるから音がたつのであろう。

ナダマーレン [na'dama:ʔrug] (動)涙ぐむ。涙が眼球の囲りに滲み出て、目が赤らむ。ものごとに感動したときに目が赤らんで、涙が滲み出てくる。例、アイブ ボーキリムヌ ヤタンドゥ ウヤヌ サウバ シキティ ナダマーリ ベータ [ʔaibu ʔbo:kiri'munu ja'tandu ʔu'jaʔnu ʔsauba ʃi'kiti na'dama:ʔri ʔbe:ʔta] (あんな暴れん坊であったが、親の左右《近況、便り》を聞いて涙ぐんでいたよ)

ナダヨーン [na'dajo:ʔŋ] (形)涙もろい。「涙弱い」の義。ものごとに感動して涙を流しやすい様。結願祭の村芝居などに感動して、老人たちが目を真赤にし、涙を流して観劇したが、中でも故米盛松氏は有名であった。例、ナダヨー アロール プソー ッファマーヌ キョンギン ミリティン ナキソーッタ [na'dajo: ʔa'ro:ʔrupyʔso:ʔ ʔfa-ma:ʔnu ʔkjogʔgim ʔmiritin na'kiso:tʔta] (涙もろい人は、子や孫の狂言《芝居》を見ただけでも泣きなされたものだ)

ツパガー [ʔpaga:] (名)禿げ頭野郎。卑語。屋号が上接すると個有名詞となる。たとえば、

[kaʔdzakenuʔ-paga:] (加治工家の禿げ頭氏) のようになる。それに、親愛、尊敬の接尾語、アーʔザ [ʔa:ʔdza] (兄) が下接して、しばしば、[kaʔdzakenuʔ-paga:dza:] (加治工の禿げ頭兄) のように用いられる。この段階からは、愛称のニックネームとして用いられるが、当の本人に対して、呼称として用いられることはない。名称として用いる。

パギスブル [paʔgisubuʔru] (名) 禿げ頭。頭髪が抜けて、頭頂部がつるつるしている頭。遺伝的に頭髪が抜け落ちたものをいう。卑語化すると、ʔパガー [paga:] (頭の禿げた奴) のようになる。例、「クンʔネヌ プʔソーʔ パギスブルʔヌ タʔクライ [ʔkunʔnenu puʔso:ʔ paʔgisuburuʔnu tʔʔkurai] (この家の人は遺伝的に頭の禿げる家がらである) 頭部の傷跡が禿げているものには、パギスブルとは言わない。

ピʔサ・スブル [piʔsa-suburu] (名) 「平頭」の義。後頭部が平たいもの、またその人をいう。産後、乳児を一方にだけ向けて寝かせる癖をつけると、その方の後頭部が平たく変形すると言われていた。アガʔフアーʔマー ユʔヌンʔトン カーʔニʔ カʔトンカʔシ ニʔバシティʔ ピʔサスブルʔ ナʔラʔシ シケー [ʔagafʔfa:ʔma: juʔnunʔtog ka:ʔni kaʔtonkaʔʔi niʔbaʔʔitiʔ piʔsasuburuʔ naʔraʔʔi ʔʔke:] (赤子を、同じところにだけかたむけて寝かして、平頭に変形させてある)

ピʔルキ [piʔruki] (名) ひよめき。泉門。乳幼児など、前頭と後頭の骨の接合するところで、そのすきまの、ピクピクと鼓動の観察される所。幼児期に、子供が引き付けを起こす際、母親が口に水を含んで、ピルキの部分に吹きかけて蘇生させる習慣があった。例、ピʔルケーラʔ ミʔジʔ フʔキʔカキティ イʔキガイラʔシ [piʔruke:raʔ miʔdʔʔi ʔʔkiʔkʔʔiti ʔʔiʔkigairaʔʔi] (泉門の所から水を吹きかけて生きかえらせなさい《蘇生させなさい》)。

また、激しい労働に従事して繁忙をきわめている様子を比喩的に表現する場合、ピʔルケーラ ʔイキ ʔスン [piʔruke:ra ʔʔiki ʔʔsug] (泉門《ひよめき》より息をする《呼吸する》) のように言う。

ブʔリʔミー [buʔriʔmi:] (名) 「折れ目」の義。目蓋が折れ重なっているもの。二重瞼の意。例、「ベーʔ ウʔキナーʔプソー プʔリミーʔンʔドゥ ʔゴーʔラー ʔカーミーヤ ʔイシウカーʔル ʔヨー [ʔbe:ʔ ʔuʔkina:ʔpuso: buʔrimi: nʔdu ʔgo:ʔra: ʔka:mi:ja ʔʔis ʔka:ʔru ʔʔo:] (我等《聞き手を含む》沖縄人は、二重瞼が多いんで、皮目《一重瞼》は少ないよ)。

ʔミー [mi:] (名) 目。視覚器官の総称。ʔミーコーʔルン [ʔmi:ko:ʔrug] (ʔ目が強張るʔ、目が冴えて眠ることが出来なくなる)。「ミーコーʔヤー [ʔmi:ko:ʔja:] (名) お目覚めとして朝食の前に食するもの。

ʔミーサマʔスン [ʔmi:samaʔsug] (動) (目を覚ます)。「ミーサミʔルン [ʔmi:samiʔrug] (目覚める)。「ミーパシウʔカーン [ʔmi:pasʔʔka:ʔ] (まぶしい)。「ミー ʔʔサウン

[mi: sʔsauŋ] (目を閉じる)。ㄱ미ー プㄱ락켄 [mi: puʔrakkuŋ] (目を開く)。ㄱ미ー
 피ㄱ카ㄱ룬 [ʔmi: piʔkaʔruŋ] (目を大きく開いて見つめる。目で叱る)。ㄱ미ー
 피카ㄱ룬 [ʔmi: pikaʔruŋ] (急に目を大きく開き、痙攣を起こして手足が硬直すること。
 癲癇性の病気を起こす)。ㄱ미ー클러ㄱ가ㄱ 「スン [ʔmi: kura: ʔgag ʔsuŋ] (目くらみす
 る。目まいがする) ㄱ미ー다라ㄱスン [ʔmi: daraʔsuŋ] (目を疲労させる)。ㄱ미ーㄱ야
 파ㄱ나ㄱ룬 [ʔmi: ʔja ʔpa: ʔnaruŋ] (あっけにとられて、目を見張る) ㄱ미ー 「미ㄱ
 룬 [ʔmi: ʔmuiruŋ] (目がじらじらして霞む、老眼になる)、ㄱ미ー야마ㄱスン
 [ʔmi: jamaʔsuŋ] (「目を病ます」の義。見たためにそれを欲しがるようになり、思い悩
 むようになる)。미ー 「판ㄱ켄 [mi: ʔpaŋʔkuŋ] (目を大きく見ひらく。まぶたをひっ
 くりかえす) ㄱ미ーヌㄱ윅 [ʔmi: nuʔjuku] (目の欲。見たために欲が出て不正を働くう
 になること)、ㄱ미ー 무ㄱ도우ㄱ룬 [ʔmi: muʔduʔruŋ] (視力が回復する。老眼が直
 る)

ㄱ미ーキラー [ʔmi: kira:] (名)「目切れ」の義。臉などに傷跡のある人。女性。女性は顔に
 傷跡が残ることを非常に嫌った。目に腫れものが出来て、その傷跡が残ると、特に女性は
 不美人の要素として嫌われた。例、ㄱ인ㄱヌ야ー 무ㄱ타ㄱ비티 「고ー라스ㄱ카ー
 데ーㄱ지 「다ー ㄱ미ーキラー ㄱ나ㄱ룬 「다ー [ʔʔinʔnuja: muʔtaʔbiti ʔgo: rasuʔka:
 ʔde: ʔdʒi ʔda: ʔmi: kira: ʔnarun ʔda:] (ものもらいをいじって化膿させると大変だ
 ぞ。臉の傷もちになるぞ)

ㄱ미ーㄱグワー [ʔmi: ʔgwa:] (名)目の小さい人。小さい目、ーグワー [-gwa] は指小辞で、
 沖縄本島方言から借用されたもの。これが再転訛して、ーガー [-ga:] となり、若年層で
 多用されていた。ㄱ미ーㄱグワー [ʔmi: ʔgwa:] は、ㄱ미ーㄱガー [ʔmi: ʔga:] ともいい、多
 少の軽蔑感が伴う。他面、親近感も伴う。

ㄱ미ー코ーㄱ야ー [ʔmi: ko: ʔja:] (名)「目強飯」の義か。お目覚め用に食べる飯。子供が朝
 起きるとき、前夜の御飯の残りや、おかず(御菜)などを朝食の前に与えて目覚めさせる
 もの。幼児等は朝起きて泣くことが多いので、これを与えて愚図つかさぬようにした。
 例、ㄱ미ー코ー야ーㄱ야 「마이ヌ・미ー스ㄱ바 「고ーㄱ라 ッㄱファーソーㄱㄱ타
 [ʔmi: ko: ja: ʔja: ʔmainu-mi: suʔba ʔgo: ʔra f ʔfa: so: t ʔta] (お目ざめには、多く、
 米味噌を食べさせて下さった)

ㄱ미ー코ーㄱ룬 [ʔmi: ko: ʔruŋ] (動)「目こわばる」の義か。目強張る。目が冴える。眠気
 がなくなる。ㄱ미ー코ーㄱㄱヌ [ʔmi: ko: raʔnu] (目が冴えない)、ㄱ미ーコーㄱリティ
 [ʔmi: ko: ʔriti] (目が冴えて)。例、ユーㄱㄱル カㄱ타サー ㄱヌムカー 「미ー코ーㄱリティ
 니ㄱ바ㄱ란ㄱ 나ㄱㄱㄱ티 「게ㄱㄱ라 [ʔju: ʔru kəʔtasa: ʔnumuka: niʔbaran ʔnarunti
 ʔgeʔra] (夜、濃い茶《堅茶》を飲むと、寝むれなくなるさ、君も知っているでしょう)

ㄱ미ースーㄱ룬 [ʔmi: su: ʔruŋ] (動)「目強くなる」の義か。すっかり目覚める。眠りから

覚めて、正常な状態になる。「ミースーラ」ヌ [ʼmi: su: raʼnu] (目覚めない)、「ミースーラ」シ [ʼmi: su: raʼʃi] (目覚めさせる)、ア「サボン」ユン ヲノーン ッ「フー」カー 「ミースーリ」ス パジ「ダー」バ 「ウンダ」 「サー」クバ [ʔaʼsabopʼ junnon fʼfu: ʼka: ʼmi: su: riʼsu padʒi ʼda: ʼba ʼʔunda ʼsa: ʼkuba] (朝食でも食べたら目覚めるだろうから、それから連れて来なさい)

「ミース・」カー [ʼmi: nuʼ-ka:] (名)「目の皮」の義。目蓋、瞼のこと。例、「ユビーン」 「ユー」キ 「シーブレー」ル 「ミース・」カー フ「クリ」 「アー」クンティ [ʼjubi: p ʼju: ʼki ʼʃi: bure: ʼru ʼmi: nuʼ-ka: Φʉʼkuri ʔa: ʼkunti] (昨夜も夜起き《夜更し》をしたにちがいない。目の皮《目蓋》が腫れているさ、見てごらん)。

「ミース・」シ「ビ」 [ʼmi: ʼnu-siʼbi] (連語)「目の尻」の義。目尻の意。例、「ミース」 シ「ビ」ナー 「ミース・」ッス「ヌ」 タ「マリ」 ベ「ー」 [ʼmi: ʼnu ʃiʼbiʼna: ʼmi: nu-ssuʼnu taʼmari beʼ:] (目の尻《目尻》には、目くそがたまっている)

「ミース・」シン [ʼmi: ʼnu-ʼʃsig] (連語)「目の芯」の義。目頭の意。ミース「ヌ」 シンナ ミ「ツム」ヌ 「ペー」リティ 「ヤム」カー 「シー」バ 「アー」シ 「イリ」ティ 「トゥ」リ ッ「フォー」ッ「タ」 [ʼmiʼnu ʼʃinna: miʼtsumuʼnu ʼpe: ʼriti ʼjamuka: ʼʃi: ʼba ʼʔa: ʃi ʼʔiriti ʼturi fʼfo: tʼta] (目の芯《目頭》にゴミが入って痛むと、お乳を出して《搾乳して》目に入れて、取り除いて下さった)

「ミース・」ッファ [ʼmi: nuʼ-ffa] (名)「目の子」の義。「まなこ」と同源。瞳の意。瞳孔も含めた、虹彩全体をいう。例、「ミース・」ッファ キ「サ」レーカー 「メー」 ヲムノーマ「ララン」 ヨー [ʼmi: nuʼ-ffa: kiʼsaʼre: ka: ʼme: ʼmuno: miʼrarap jo:] (「目の子」《虹彩》を切られたというのであれば、もう、ものを見ることはできないよ)

「ミース」ッ「サン」 [ʼmi: nusʼsag] (形)「見にくし」の義か。見苦しい。目ざわりである。体裁が悪い。例、「ウ」リヌ 「シー」ヨームイヨース「ヌ」 ヲドゥク 「ミース」ッ「サ」ティル 「ウ」ヤー イッ「ケナ」 キ「ム」ヤミ 「オー」ッタン「ドゥ」 「ヤー」タ スン「ケン」 「マー」ラソー「リ」 「ナー」ン「セン」 [ʔuʼrinu ʼʃi: jo: -muijo: ʼnu ʼduku ʼmi: nusʼsatiru ʔuja: ʔik ʼkenaʼ kiʼmuʼjami ʼʔo: ttanʼdu ʼja: ta ʼsugʼkem ʼma: raso: ʼri ʼna: nʼseg] (その人のやり方《仕様模様》が見苦しかったので、親は大変心を痛めておられたが、しばらくすると亡くなられてしまった)

「ミース・」ッス [ʼmi: nuʼ-ssu] (名)「目のくそ」の義。めやにの意。眼病にかかると、目くそがいっぱい出て、上下の瞼にくっついて目が開けられないこともあった。例、「ミース・」ッス「ヌ」 カ「タマリ」ベ「ー」ティ 「ユー」 「バイ」ティ「ウ」リ「シ」 ヤー「ラマ」シ ッ「スリ」 [ʼmi: nu-ssu-mn kəʼtamaribe: ʼti ʼju: ʼbaitiʼ ʔuʼriʼʃi ja: ʼramaʼʃi sʼsuri] (目やにが固まっているので、お湯を水で割ってぬるくし、それでゆっくり、ていねいに拭き取れ)。

「ミーパガー」[mi: paga:] (名)「目禿げ」の義。目病にかかって、目の周囲が赤くただれている人。卑語。不美人の代名詞として用いられ、笑いの対象とされる。

例、プ「スヌ」 ビ「ナ」ー 「ウイ」ナー フ「ヨー」ン 「アリ ミ」ジヌ「 イ「キラ」サンダ「
ミーパガー 「ナリ 「ベー」ン「ティ [pɯʔsunuʔ biʔnaʔ: ʔuiʔna: Φ uʔjo: og ʔari
miʔdʒinuʔ ʔiʔkiraʔsanda ʔmi: paga: ʔnari ʔbe: nʔti] (人間として、そもそも不潔で、
怠惰であり、水の少ない所だから、目はげの病気にかかっているさ)

「ミーヌ・フチ」[mi: ʔnu-Φ uʔtʃi] (連語)「目の口」の義。目頭の意。ミー「ヌ 「シン
[mi: ʔnu ʔʃin] (目の芯)ともいう。

例、「ミー」ヌ フ「チ」ュー「 アガー」ア「ガ」シ タ「ダリ」ティ 「ミーパガー 「ナリ ベ「ー
[mi: ʔnu Φ uʔtʃe: ʔ ʔaga: -ʔaʔgaʔʃi taʔdariti ʔmi: paga: ʔnari ʔbe: ʔ] (目頭が
真赤にただれて、目禿げ《眼病》になっている)

「ミーヌ・マチ」[mi: nuʔ-matsi] (名)「目の睫」の義。単に、マチ [matʃi] というこ
ともある。サ「カマチ [saʔkamatʃi] (逆睫)は、睫が内側に生えたもの。

例、「ミー」ヌ・マチ「ヌ ナ「ガー」 プ「ソー」 ア「バ」レーン [mi: nu-matʃiʔnu
naʔga: ʔ pɯʔso: ʔ ʔaʔbaʔre: ŋ] (睫の長い人は美しい《美人である》)

「ミーヌ・ユク」[mi: nuʔ-juku] (連)「目の欲」の義。見ることによって、そのものを欲
しがる気持ちが起きること。見なければよかったのに、見たばかりに、つい出来ごころ
が起きること。例、「ナーン」カー 「ナーン」ムティヌ ク「ラシン」 ナ「リ」シタンド
イ「ルジ」ナムヌ 「ミリ」ティ 「ミーヌ・ユク」バ 「シキ」ティル シ「ル」ッコー 「ナレー
「ツォー [ʔna: ŋka: ʔna: m-ʔmutinu kuʔraʃinʔ naʔriʔʃʒtandu ʔiʔrudʒiʔna-munu
ʔmiriti: ʔmi: nu-jukuʔba ʔʃikitiru ʃiʔrukʔko: ʔnare: ʔtso:] (なければ無いなりの
暮らし《生活》も出来たのであるが、いろいろなものを見てしまって、目の欲が出て《不
正をはたらく結果となり》、生活を破綻させてしまってあるんだよ)

「ミーピカリ・ムヌ」[mi: pikariʔ-munu] (名)「目光り者」の義。癲癇症の人。失神しやす
い人。例、ウ「ヌ 「ッファ」ー 「グマー」グマー 「シェン」ケンラ 「ミーピカリ」・ムヌ
ティ ア「ザリ」ブタ 「ヨー [ʔuʔnu ʔffa: ʔ guma:ʔguma: ʔʃe: ŋʔkenra ʔmi: pikari-ʔmunuti
ʔaʔdzaributaʔjo:] (その子は、幼少の頃から《小さかった頃から》癲癇症の人といわれて
いたよ)。高熱を発すると、失神状態になり、目を大きく見開いて、体を硬直させる癖の
ある者をいう。

「ミーピカ」ルン [mi: pikaʔrun] (動)「目を光らせる」の義。転じて、年長者から叱られる。
ぎょろ目で叱られる。癲癇を起こす。

例、ヨー「ヨー」 ア「ブジェ」ー 「ミーピカ」リ 「オー」ル 「ダー 「デー」ジ 「ダー
[jo:ʔjo: ʔ ʔabudze: ʔmi: pikaʔri ʔo:ʔru ʔda: ʔde:ʔdʒi ʔda:] (ほらほら、おじ
いさんが目を光らせて怒っていらっしゃるぞ、大変だよ)。ニ「チ」ヌ 「ノー」 ア「ガリ

ティ 「ミーピカ^リ」 「シーベ^ータ^ー ヤー」 [niʔtʃiʔnu no:ʔ ʔaʔgariti mi: pikaʔri
ʔʃi: be:ʔta ʔja:] (熱が脳にあがってしまって、目を光らせて《引きつけを起こして癲癇
症状を起こして》いたよ)。ウ^ヤヲヌ 「ミーピカラ^リシ^ー オーラン^カー ッ^ファー^ー
ヤ^ビムヌ ナ^リヲス」 [ʔuʔjaʔnu mi: -pikaraʔʃi ʔo: ragʔka: fʔfa:ʔ jaʔbiʔmunu
naʔriʔsu] (親が注意して監督していないと、子どもはぐれた子供になってしまうよ)

「ミー^ムタイ」 [mi:ʔmutai] (名)「目もたげ」の義。「見向き」の意。応答するために顔を
持ちあげること。挨拶すること。関心を示す。例、^ウナ^ー 「ベ^ンド^ウ ヨ^ー イ
カ^ーサ^ー アイ^ジ シ^ンタン^{ティ}ン^ー ミ^{ーム}タイ^ンヤ^ンツ^{ァン} サ^ヌ」 [ʔʔuna: ʔbe: n
ʔdu ʔjo:ʔ ʔika:ʔsa ʔaiʔdzi ʃiʔtantim mi: mutaiʔjantsan ʔsanu] (そこに居るん
だがねえ、どんなに合図《挨拶》しても、見向きもしないよ)

ミ^ーヤ^ーマ^ー [mi:ʔa:ʔma] (名)目の小さい人。小さい目、-マ [-ma] は指小辞。愛称を
表す。-マ [-ma] が下接する際、①上接語の末尾母音が広母音の [a] の場合、それを長
母音化させて、-マ [-ma] がつく。例、paʔta (旗) → [paʔta:ʔma] (小旗)。②上接語
の末尾母音が奥舌狭母音の [u] の場合、奥舌半広長母音の [o:] となって、-マ [-ma]
がつく。例、[paʔku] (箱) → [paʔko:ʔma] (小箱)。③上接語の末尾母音が、前舌狭母
音 [i] の場合、前舌半広長母音 [e:] となって、-マ [-ma] がつく。例、[tʃaʔki] (竹)
→ [tʃaʔke:ʔma] (小竹)。④上接語が／CVV／構造で、しかも末尾母音が前舌狭母音 [i]
の場合、接中辞 -ヤ^ー [-ja:] が現れ、それに指小辞 -マ [-ma] がつく。例、[ki:]
(木) → [ki:ʔja:ʔma] (小さな木)、ガイ [gai] (杓文字) → [gaiʔja:ʔma] (小さな
杓文字)、gui (杭) → [guiʔja:ʔma] (小さな杭、材)。

「ミー^ンパナ」 [mi:ʔpana] (名)「目鼻」の義。顔のこと。顔全体を「目」と「鼻」で代表さ
せた表現。^ンシラ [sira] は、「頬」の部分に中心的な意味があるのに対し、ミ^ーパナは
「顔全体」の表現に中心的意味がある。「ミ^ーンパナ フ^ンクリ^{ティ}ン キ^ムイ^ンツ^{ァン}
[mi:ʔpana ʔʃuʔkuritiʔ kiʔmuiʔtsa: ɲ] (顔が腫れて、かわいそうだ) は、「顔全体」
の表現が意味の中心となっている。

「ミ^ーヨ^ー」 [mi:ʔjo:] (名)「目様」の義か。目つき、目で合図すること。目でものを言う
こと。目くばせ。例、プ^ンス^ンヤ^ン プ^ンス^ヌ 「オー^ンル^ン マイ^ン ヤ^ッタ^ベー^ンティ
ウ^ンヌ^ンク^ン ミ^ーヨ^ー シ^ー ア^ンジ^ン シ^ンカ^スン^ドウ^ン ム^ット^ウ シ^ンカ^ヌ
[puʔsunʔjam puʔsunu ʔo:ʔru ʔmai ʔjatta-be:ʔti ʔuʔnusʊʔku mi:ʔjo: ʔʃi:ʔ
ʔaʔdziʔ sʃiʔkasunduʔ mutʔtuʔ sʃiʔkanu] (他人の居られる前だったので、あれほど目
で合図して言い聞かせた《注意した》が、いっこうに聞き入れない)

ミ^ンツ^ム [miʔtsuʔmu] (名)、目の中に入ったごみ(塵埃)のこと。「目粒」の義か。子供
の目にミツムが入って泣くと、母親は、母乳をしほって目の中に流しこみ、洗い流したも
のである。母乳は目の中に入ってもカサカサせず、滑らかな感じである。例、「ミ^ーン

ナ「カ」ナ ミ「ツム」ヌ 「ペー」リティ ヤ「ミ」シバ 「トゥ」リ ッ「フォー」リ [「mi: ʔn
na「ka」na mi「tsumu」nu 「pe: ʔriti ja「mi」ʔjiba ʔturi f「fo: ʔri」] (目の中にごみが入っ
て痛いから取って下さい)

「ミン」タマ [「min」tama] (名)「目の玉」の義。眼球の意。目の大きい人を、「ミン」タマー
[「min」tama:] という。例、「ミー」ヤ ビ「カ」リティ 「ミン」タマー 「グルグル」シ「
ティー」 プ「ス」 ミ「ロー」ッ「ター」 [「mi: ʔja pi「ka」ʔriti 「min」tama: ʔguruguru
ʃi「ti: ʔ py「su」 mi「ro: t」ta] (目は大きく見ひらいて、目ん球をギョロギョロさせて、
人を見られた)